

2016年10月23日の思い出

勿工建築科OB会第2回親善ゴルフコンペの日がやって来た。小名浜カントリークラブへ到着すると駐車場は満車状態で係員が苦勞して誘導支持をしていた。僕の車は、白線内の駐車スペースには止められず、誘導係員に指示された枠外のスペースに駐車することになった。係員は「プレイですね？」と確認したが、「コンペの取材ですので1時間ほどで終わると思います」と答えた。車を出ると、ちょうど「勿工建築科OB会の皆さんは開会式が始まりますのでレストランの前まで集合してください」という放送がされている時だった。レストランがどこなのか、またその集合場所がどこなのかわからないので玄関にいた従業員に尋ねると、あわただし中その場所まで僕を導いてくれた。9時15分から開会式が予定されていたが、それよりも早く始められたようで、僕は開会式の最初の場面には間に合わなかった。18回生の鈴木忍さんがコンペの説明をしているような言葉が聞こえたが、僕が到着した時はその挨拶、説明が終わりかけていた。忍さんは僕の顔を見るなり、OB会代表として挨拶していただきますので千葉さんお願いしますと突然指名された。予想はしていたことでもあるので驚きもせず、拒むこともなく、参加者の前に出て挨拶をした。言葉を準備して来たわけではないので、即興での挨拶となった。「おはようございます。勿工建築科OB会のゴルフコンペにこんなにたくさんの方が集まり、そして天気も良く、秋の大会には最高のコンディションでプレイができてそうです。昨日鈴木忍さんから参加者リストが届きましたが、13組45人の参加という人数に驚いております。中略。「私は事務局だよりを毎年作成しています。今日はそのために参りました。集合写真を撮りたいので協力してください。」と挨拶をした。集合写真の撮影に全員が協力をしてくれた。参加者の全員がパター練習場の前に太陽に顔を向けて10mほどの帯状に並んだ。僕はiPhoneを構えてタッチパネルのシャッターのボタンを押した。しかし、何度押してもシャッターが切れない。指に汗が滲んでだめなのかと思い、ズボンの太ももで指を何度も擦り汗を拭いてパネルのボタンを押してみる。しかしシャッターは切れない。全員が集合しているのにそんなに時間を取らせるわけにはいかないと思い焦りが出てくる。それでも集合している全員が僕の撮影に待ってくれている。誰一人としてブーイングをすることもなく待ってくれていた。そしてなんとか2枚の集合写真を撮影することができた。撮影が終わってから、平子さんがタッチパネルのボタンは、光に反応してしまうから、パネルが太陽側にあると反応しなくなるようだと言ってくれた。その後、パネルのボタン以外でシャッターを切る方法を思い出した。それは外枠に付いているボタンを押せばシャッターは切れる。そのことを思い出したのは、帰宅してからだった。撮影が終わると、固まっていた参加者はばらばらと広い範囲に移動し始めた。練習用のグリーンの上でバットの練習が始まった。今回のコンペ参加者集めに精力を注いできたのが18回生と聞いていた。18回生には、話しやすい鈴木忍さんがいる。彼を通して、18回生を紹介してもらった。参加者を呼びかける手段は、パソコンのメールでの交信が主体だったようだ。特に田村建材に勤務している渡辺さんが主体となってまとめていたようだった。この日45名参加の中で、18回生は10人もいる。18回生の集合写真を撮りたいというと、18回生が集まってくれたので10名の集合写真撮影に成功した。僕の近くに嵐さんがいた。嵐さんは、僕がゴルフをやらないことは分かっていた。僕は、大会要項のプリントを見ながら、ゴルフの用語を教えてもらった。ダブルペリア、オール6インチリブレース可、ドラコン、ニアピンを説明してもらった。嵐さんは、バット練習してみないか？と言って、パターとボールを僕に預けて、そして僕は3球だけ

打たせてもらった。3球ともピンに入ることはなかった。3球打ち終わると直ぐに嵐さんに返した。初めて見るグリーンの芝に感動した。それは、どうしてこんなにすばらしく刈ることができるのだと思うほど目が細かに滑らかに仕上がっていた。この芝の上でボールを転がせば、芝の抵抗はほとんどないのではないかと思う。入れようとしてもなかなか思うように入らないのは、傾斜や風や距離感に対する力のコントロールが思うようにならないのがゴルフなのだろう。

素人の考えなのですみません。僕は10回生。10回生は3人参加している。小野真人、村谷徹、大竹正美。村谷に声を掛けた。去年も今年も総会には参加していなかったのに、3年ぶりに会うことになったが、懐かしさはなかった。時々電話をくれる親しい同級生の一人だ。着ているものを見ると、まさにゴルフに似合うような格好だ。チェックの青と紺のカラーのズボン、横しまの白とグレーのTシャツの上に白い柄の入った黒いボロシャツをまとうていた。カッコいいね、そのズボンはゴルフファッションなの？と聞くと昔買ったやつだけだね、と少し照れながら答えた。どれくらいの間隔でゴルフ場に来てるの。月1は来るね。へーそんなに頻繁に来るの。ここの会員になってるから。徹とばかり話をしてもらえない。小野真人はどこにいるのだと思うと探した。先日、小野真人からゴルフコンペのことで連絡が来た。10回生が思うように集まらないで悩んでいた。小松はゴルフをするが、地域の区長をしていて、その日は区長の仕事があって出られないと言われたようだ。鈴木秀明はどうなの、というと連絡したがその日は予定が入っていると言われたようだ。馬上智も連絡したがダメ。それじゃ、俺はゴルフはやらないが事務局だよりのネタ取りに参加するよと小野真人に伝えた。小野真人との電話が終わってゴルフコンペの日、予定が入っていないか確認してみると、いわき市民総ぐるみ運動の日となっていた。いわきの全世帯が参加して町の掃除を行う日になっていた。しまった。うっかり参加すると言ったがどうしようかと考えてしまった。

掃除は2時間予定しなければならない。それが終わって駆け付けると開会式には間に合わない。そのことを後日、小野真人に伝えると、お昼飯と一緒に食べようと言ってくれた。そんなやり取りをしての小野真人とのこの日の再会だった。小野真人は今年の総会には参加していた。小野真人を見つけて声を掛けた。いろいろ段取り大変だったね、今日は真人のグループに就いていきたいと思っている、いいかなと相談した。小野真人を見つけたのは、グリーンへ出るために順番待ちをしている場所だった。電動カートが並び、参加者がたくさんそこに待機している。僕は、面識のある顔触れに声をかけてグループの写真撮影をお願いした。写真撮影には、皆が気持ちよく協力してくれる。カートに乗って順番待ちをしていた13回生の高木英淑を見つけたので声を掛けた。最近「現場が忙しいので総会参加できません」という返信はがきが何度かあった。震災が起こって5年間、彼は総会に参加しない状態が続いていた。「高木さん、久しぶり、現場忙しそうだね」と挨拶をした。「あ、千葉さんご無沙汰してすみません」と言って少し話してから、グループの写真撮らせてもらおうと言うと、「やったー」と言って喜んで応じてくれた。そんな風にして何グループかの待機中の写真を撮ることができた。カートが自動で移動するのを見て驚いた。これってオートクルーズですか？と咄嗟にその言葉が出てしまった。そんなわけないでしょう、道路に電気が通っていてそれが動力となって動いていると言ったのは小野真人だった。カートは人を感知しないから、走っている前に立っていたら吹っ飛ばされるよと言ったのは、9回生の平子さんだった。オートクルーズという言葉に反応した参加者から笑いがあり受けたようだ。そしていよいよ嵐さんたちのグループが東第1ホールからのスタートとなった。ステンレスバーを4本取

り出して、1本づつ引かせたのが嵐さん。それによって打順が決まる。嵐さんたちのグループはキャディが付いていた。キャディを付けると1グループ1万2千円余分にかかる。1人3千円の負担となる、と嵐さんが教えてくれた。13グループ中、たったの1グループがキャディ付だ。「昔はキャディがたくさんいたけど、今はほとんどいないね、キャディはなくともプレイはできる」と言ったのが平子さんだった。嵐さんたちのグループ、東9ホールの第1ショットが始まった。ボールを打った瞬間から、どこにとんだか全く見えない。キャディが位置を教えてください。周りの景色が緑一色で、1日中この環境で過ごしていれば視力は良くなるかもしれない。4人全員が1打目を終了し、打ったボールへと移動が始まった。僕はゴルフに関しては全く知識がない。だからそれなりに伝えるより方法がない。フェアウエーに乗っているボールが2つあった。プレイヤー4人は、カートに乗って自分のボールを追っていく。キャディは、カートより早めに出発しそれぞれの打球に追いつく。僕は、カートの後ろを追いかけて進んでいった。キャディが僕を見て、プレイしないでギャラリーですか？と言った。「そうです」と言った。受付でギャラリーの申し込みはしましたか？「していません」。グリーンはボールが飛んできて危ないところです。グリーン内で怪我をしても当社は責任を持ちません。それについての承諾書が必要です。このまま戻って、承諾書に住所氏名連絡先を書いてきてください。それからここはゴルフ場なのでジープはダメです。他のズボンに履き替えてください。ジープ以外持ってません。と言って署名のためにフェアウエーを戻った。5mほど戻った時、小野真人が「そこ歩いていたら飛んでくるボールがあるから危ない」と叫んでいた。確かに次の組がショットを始めていた。僕はそれを見て戻ることができないと思い、キャディに戻れないから一緒に歩きます。とお願いするように言った。それじゃ、フロントに電話をします。と言ってそのまま歩くことをとりあえず承諾してもらった。3ホール目の途中でバギーカーに乗った従業員が僕を見つけて、寄って来て、ギャラリーですねと尋ねた。パインダーに挟んだ用紙を差し出し、ここに必要事項を記入してください。僕は、住所、氏名、携帯電話番号を書いて渡した。そして更に従業員は、ジープはダメです。他のものに替えてください。と言われたが、初めてゴルフ場に来たのでそんなことわかりませんでした。と言ってその場を凌ぐほかなかった。ゴルフ場は、庶民のスポーツではなく、敷居が高く、ゴルフ場自体、プライドが高かった。そして午前中9ホールをそのグループに付いて行きカートに乗ったり、歩いたりしながらギャラリーとなって見学することになった。

第1ホールを4打(パー)で終えたプレイヤーはいなかった。ある人は、バンカーに入れてしまっ、何度打ってもそこから出せないでいた。彼はギブアップと言ってそのホールを諦めた。ギブアップなんてスコアはない。何打プラスにして第二ホールから続けると言ったのが小野真人だった。第1ホールを終えて第2ホールのボールを打ち出すためのティーグラウンドに移動すると、前のグループが打ち終えたばかりで、フェアウエーを歩いていた。直ぐに打つことができずに、そのグループの第2ホールを終了するまで待つことになった。第2ホールのティーグラウンドに別のキャディが一人いた。僕が付き添っているプレイヤーは、ティーグラウンドに立ちショットを待っていた。僕は、カートに座り彼らを見ていた。そしてそのキャディと話をすることができた。このキャディはここにしながら僕と話をしてくれてくれた。そしてこのグループの第2ホールが始まった。Aさんがドライバーを大きくスイングすると、ボールはころころと転がりながら、崖を転がり落ちていって、第2打を打てるような場所にボールはなかった。そのまま続けられ、カップに入れるまで相当の打数が必要になるのが予想され

た。僕は、キャディと話をしていたが、あんな時はどうなるのと尋ねると、ティーグラウンドに戻してプラス4打から再スタートだねと言った。全員ティーショットを終えて移動した。ティーグラウンドからカップのあるグリーンまでこのグループ以外に人影はない。駐車場には入りきれないほどのプレイヤーが来ているのに、ゴルフ場では、ティーグラウンドからグリーンまではこのグループだけのものだった。みんな、開始時間を守り、マナーを守りながらプレイすることによって、安全にプレイを楽しむことができるように組み込まれていることがこの時に分かった。

アウト5ホール目が終わると、何故か続けて次のホールへ進もうとしない。前のグループがプレイしている様子も伺えない。カートを降りたその目の前に、小さな小屋があった。売店と休憩所と用足し場が一緒になった建物だった。この時天候は、穏やかだった朝と比較すると、雲が陰り風も強めに吹き始め、10月下旬にしては厳しい状況に変化していた。朝から半袖シャツで行っているプレイヤーには、寒さが厳しいのではなかっただろうか。僕はジープを履き、ボタンシャツの上にジャケットを羽織っていたので、その強めの風には耐えることができていた。日差しはそれほど強くはないし日焼けの心配はなさそうだった。売店に入ると飲み物やスナック菓子などショーケースに並んでいた。小野真人が一番小さな缶ビールを注文して飲み始めた。「帰りの車運転大丈夫なの」と聞くと、「これからまだまだプレイが続く。終わるころには冷めている」と言って乾いた喉を潤していた。僕より18歳年下の中野さんも、売店に入ってきた。小野真人が彼に「飲むか？」と言うと「はい」と言って小野真人の番号の「付け」にして普通サイズの缶ビールを選んで飲んだ。ゴルフのプレイをする人たちは、1本くらいのビールに帰りの運転を心配するなど言うことは関係ないようだった。小屋の裏側にトイレがあったので開会式から用を足していなかった僕は、長い小便を済ませることができた。この時計の針は11時を回っていた。後4ホール残っている。12時の昼食は諦めた。休憩を入れてリフレッシュしたところでプレイが再開される。女性キャディが歩きながら、私たちが乗ったカートをコントロールしている。後半2つ目のホールでのプレイで嵐さんが2打目でグリーンにボールを載せた。そして更に2打でカップに入れてパーとなった。朝から4人がプレイしていて初めての事だった。このようなゴルフを目指し、それができたときの感動を味わうためにゴルフをしているのかもしれない。前半終了となり、カートはレストハウスへ到着した。パーティーに同行させてもらったことに4人にお礼を言った。レストハウスの中のレストランには大勢のプレイヤーがテーブルを囲んで食事をしていて。テーブルに座っている客は、ほとんどがOB会のメンバーだった。私のここへ来た目的はOB会の事務局だよりこの日の様子を伝えることだった。グループ毎にテーブルで食事をしている人、食事を待っている人に声をかけた。初めて見る顔ぶれもあるが、テーブルに一人はなんとなくOB生かなと思える人もいて声をかけてみる。「グループの写真を撮らせてください」とお願いして快く写真撮影ができた。撮った写真を後で確認したがレストランでは38名分の写真撮影だった。参加者が45名だったので7名は見逃したか、まだプレイ中だったかのようだ。私は同級生のいるテーブルに招かれご馳走になった。食事が終わると後半のプレイのための練習があると席を立っていった。僕は1日中、外で過ごすことは滅多にない。日に焼けた顔がひりひりしている。私のゴルフコンペの取材は午前中で終わりとなった。私はゴルフ場でゴルフを見たのは初めてのことであった。なんの知識もなくギャラリーとしてグリーンを回らせてもらい、施設の人には迷惑をかけてしまった。ゴルフの知識もなく文章を書いたご協力に感謝。

10回生千葉良司

健康を意識した生活

日経新聞より
千葉良司

2017年5月10（水曜日）日経新聞、経済教室、真野俊樹多摩大学教授の記事に興味を持ち、長い論文を自分なりに考えてまとめてみました。

日本の財政が危機に瀕する中で、医療費の高額化が問題になっている。主因は高齢化と技術進歩だ。国民医療費は、毎年数千億円から一兆円の規模で増え続けている。日本の医療費は国際的にみても高水準だ。先進医療の癌に対する粒子線治療は自己負担部分のみで約300万円という高額だ。18世紀末にマルサスは、人口の増加に対して食糧生産が追いつかないという人類の危機を予言した。しかし科学技術の進歩で危機は起きなかった。現在の医療機器も、同じようにイノベーション（技術革新）で乗り切れるだろうか。危機の状況では、「医療の高品質」「安いコスト」「アクセスの良さ」の3つの併存は不可能になる。国の財政状況により保険でのカバーは異なる。日本は高額である、抗がん剤は保険でカバーしているが英国ではカバーしていない。高齢社会になれば生活者の医療ニーズは高まる。財政の制限がなければ「いつでもどこでも」「最先端」の医療を求めることができるが、制限があれば、安くて良いものが求められる。すなわち医療の価値を生活者が選択して決めることになる。体調が悪くなると直ぐに医者に診てもらうといった国民皆保険下の価値観から、なるべく自分で自分の健康を守ろうという方向への変化が現れるかもしれない。医療の中心を担う医師の役割が技術や専門医志向だけでは高齢化社会を乗り切れない変化が訪れている。すなわち医療に求められるものが提供者側の論理から生活者側の価値へと変化している。選択と言うのは、患者が医療に参加するということである。ここに3つ指摘しておく。第一に、最大の特徴は、医療は生活する上での必需品である。よって近代生活のために不可欠なインフラとして公共性が必要になる。日本では国民皆保険制度が空気のように当然のようになっている。第二に、日本の医療制度は自己負担額を意識しにくい仕組みになっている。受診抑制を起こしにくくつまり平等な医療を受けられるという利点がある。その結果、日本人にはあまり健康について関心を払わなかったように思える。例えば中国では多くの高齢者が公園で太極拳をしている姿を目撃する。米国人は、加入している医療保険や病気について医師並みの知識を持っている。日本は、医師にお任せ、それも病気になってからでよかった。しかし今後は意識変革が必要になる。第三に、超高齢化社会に日本で医療が生活の一部になり、医師が患者の病状を判断することが困難になりかかりつけ医そのものの存在が否定される。専門医や今後進歩してくる人工知能（AI）に置き換えられ、従来型の医療の枠を超えた役割を担う、かかりつけ医が求められる。近い将来、情報通信技術（ICT）を使った遠隔診断やAIを使って患者が自ら判断するとか、薬局で血液検査をするといった技術への需要が拡大する。つまりこれらが医療費を効率化、低コスト化する。日本がこの分野で先陣を切ることができれば、医療産業の発展が期待できる。

AI活用し「知」の価値を高める

日経新聞より
千葉良司

人工知能（AI）の技術革新により設計など「知」を扱う仕事の様変わりするかもしれない。AIが得意な分析などは機械に任せ、人はより創造的な仕事に専念できるようになる可能性がある。AIを用いた知的活動の生産性を高めるには、膨大な情報を集めたデータベースの育成や知的財産権をめぐる法整備が欠かせない。研究開発や企画、設計、医療などの分野がAIに期待できそうだ。ものづくりでも設計にAIを活用する例が広がり始めた。3Dプリンターの利点はコンピューターのデータを元に複雑な部品を作れるが、形や用途が似た部品のデータを共有し、設計の手間を省ける。AIで欲しいデータを探す

技術も生まれた。大切なのは、データベース（プラットフォーム）の育成だ。AIが画像などを学んで信頼性の高い判断を下すには、数十万から百万のデータが必要とされる。そんな規模に達したプラットフォームは日本には少ない。画像をどんな機器でも読みだせる標準化や企業同士を結びネットワークの構築が必要だ。小説を書いたり作曲をしたりするAIも登場した。著作権法では「著作者が思想や感情を創作的に表現したもの」が著作物とみなされ、AI作品は該当しない。ルールづくり必要。

6代目会長就任挨拶

10回生
千葉良司

私が建築科OB会に参加したのは平成5年ですので、24年前と言うことになります。この年から毎年会員として総会に参加するようになりました。その3年後、10回生の同級生の幹事が若い命を絶ち、後釜として私が幹事となりました。その後総会は勿論ですが、幹事会にも毎回出席し、月日が過ぎいつしか役員となりになりました。その後いつの間にか10年間を事務局長としてOB会の仕事に従事してきました。昨年まで2年間を副会長として勤め、今回6代目の会長という重たい席に着くことになりました。その間、行事にはすべてに参加をしました。行事には、総会の他、幹事会、執行部会、新年会があります。これらはOB会会員の参加する行事であります。その他に学校へ行って行うものもあります。それは、在校生の3年年に対して卒業する前日に我々が学校へ行って行うOB会の入会式です。この時は、卒業設計作品を事前に審査して入選者を決定し、入選者に表彰することも兼ねています。その中で3年生と一緒に我々が準備した弁当を食べる昼食会も行っています。その他何年か前までは、OB生が在校生に設計の手助けをする設計塾も行っていました。このようにして1年間の中でOB会のいろいろな行事に携わり、学校の先生方との交流も継続しました。総会では年に1度の集まりを楽しみにしているOB生が参加した時に、年代の壁をなくし交流を持つことができました。年に1回、2、3時間の中でどれだけのOB生と交流が持てるかは限界があります。しかし毎年、毎年参加を重ね24回の回数を積み重ねるといつの間にか参加したOBの先輩、後輩が知人となります。このことがOB会の総会を開催する意味の大きさなのではないかと最近感じています。先生、元先生、先輩、後輩が毎年集まって親睦を深めます。私はOB生と直接の仕事関係はありません。この歳になると親友とか、友人という関係が薄くなる傾向にある中で、定期的に集まってOB会について話し合い、その後親睦を深められる機会を持つことができ、この積み重ねが信頼関係を育ませるものと感じています。現在私は、現役で仕事に従事していますが、OB会と言う存在があって、そのOB会の仕事をしていることで別な緊張感を持つことができ、生きていくうえでとてもいい刺激を頂いています。この会がいつまでも続くことを切に祈りつつ私のOB会に対する思いを伝えさせていただきます。

編集後記

10回生
千葉良司

事務局だより作成の経過をお話したいと思います。年に1度だけOB会の行事等を記録して発行している事務局だよりは、今回で24号を経過することになりました。先輩の創刊以来、毎年欠かすことなくどうにか年に1度は必ず発行にこぎ着けています。私は事務局長になったときから、事務局だよりに関わるようになりました。平成18年2月15日第12号は、私が初めて作成した「事務局だより」です。前号を見よう見まねで作成しようとしたが思うような物からほど遠いところでとりあえずの完成でした。A4サイズ1面のみでワードで作成した物です。難しさを実感しながら、また自信もないまま事務局長でいる間、仕事として毎年作成しなければならぬという義務感を抱きながらの作成でした。12号から23号まで行事の

報告を主な内容としてA3サイズ2面まで書くことが精一杯でした。今回の24号に当たっては、行事が終わるとあまり日を待たず文章を仕上げ一つ一つ完成させながら積み重ねていきました。仕上がりしてみるとA3サイズ両面2枚のボリュームになりました。ところが中途半端な余白ができてしまい、事務局だよりの見栄えが良くありませんでした。余白を埋めるために書き足さなければなりません。しかしすらすらと文章ができあがるわけでもなくどうしようか考えました。そして考えた末に私が日記として書き溜ておいたものの掲載でした。日記を書いている、それが世に出ることなど考えていませんでしたから、書いた日記はいつも中途半端で終わっていました。それを掲載することに決めてから、半端な文章の続きを書き始めました。過去のことなど面倒で思い出したくもありません。しかし書いてみると意外にその当時のことが思い起こされてくる。不思議な経験をしました。一つの物を完成させて事務局だよりに貼り付

けていくわけですが、それでもうまく用紙を満たすことができません。そしてもう一つ、もう一つと仕上げていって、いつの間にか、A4サイズ20ページぐらいのボリュームになりました。そして20ページを目指して作成しているわけですが、実はこの文章自体20ページ最後に余白を埋めるための文章です。ほとんど毎回そうですが、今回の第24号も、私1人での作成です。幹事会、総会、新年会、設計コンペなどの行事は固定的ですが、富樫先生が昨年亡くなられたこと、先生宅へ訪問したこと、私の60歳過ぎてからの受験体験、初めて行った富士山紀行、前回事務局だよりで書いたゴルフコンペの別の面からの大会様子、そしてたまに新聞を読んで興味を持ち読み流すだけではもったいないと思いまとめたものなど盛りだくさんです。しかし全て私だけのことのため、読者には飽きが来ます。次年度は、皆さんからの投稿をお待ちしてこの事務局だよりを締めたいと思います。ご拝読ありがとうございました。

平成25～29年度 勿工建築科OB会総会 出席者

No.	回生	No.	氏名	幹事	平成29年 第25回	平成28年 第24回	平成27年 第23回	平成26年 第22回	平成25年 第21回	参加回数	延べ人数
1	来賓	1	元建築科長		富樫要次様	富樫要次様	富樫要次様	富樫要次様	富樫要次様	5	
2		2	校長			富樫 実様	深谷茂樹様		若菜靖彦様	3	
3		3	教頭		松崎彰彦様	荒川俊一様	荒川俊一様	荒川俊一様	高梨哲夫様	5	
4		4	教頭		田畑 淳様	松崎彰彦様	松崎彰彦様		櫻井克彦様	4	
5		5	建築科長				寺島弘幸様			1	
6		6	建築科				佐藤秀生様		飯塚 誠様	2	
7		7	同窓会々長		高瀬善溢様	高瀬善溢様	高瀬善溢様	高瀬善溢様	高瀬善溢様	5	
8		8	講演会講師					菅田貴博様		1	26
			計		4	5	7	4	6	26	
1	1	1	片寄 元橘			○				1	
2		2	櫛田 常雄	幹事	○	○	○	○	○	5	
3		3	鈴木 正吉	幹事	○	○	○		○	4	
4		4	高木 重俊			○				1	
5		5	箱崎 征孝		○	○				2	
6		6	真石 和男			○				1	
7		7	山口 妍一			○				1	
8		8	渡辺 嘉孝			○				1	16
9	2	4	鈴木 公男					○		1	1
10	3	2	太田 功			○				1	
11		3	北郷 哲夫	幹事	○	○		○	○	4	
12		5	篠崎 良司		○					1	
13		6	鉄 庄吉						○	1	
14		7	本田 傳	幹事	○	○				2	9
15	4	1	鈴木 茂信	幹事		○	○	○		3	
16		2	高杉 吉正	幹事		○	○	○	○	4	
17		3	渡辺 忠敏	幹事		○	○	○	○	4	11
18	5	1	酒井 晃	幹事	○	○			○	3	
19		2	小林 仁	幹事	○	○	○		○	4	7
20	6	1	嵐 繁雄	幹事	○	○	○	○	○	5	
21		2	清水 徳男				○			1	
22		3	高橋 貞徳		○	○	○			3	
23		4	田口 孝夫			○		○		2	
24		5	仲居 二郎		○		○	○	○	4	
25		6	箭内 栄				○		○	2	17
26	7	1	石山 圭一		○	○	○	○	○	5	
27		2	木幡 晴吉					○		1	
28		3	佐藤 利次					○		1	
29		4	志賀 利光	幹事	○	○	○	○	○	5	
30		5	根本 隆男				○	○	○	3	
31		6	福富 大祐	幹事	○	○	○	○	○	5	
32		7	吉田 謙一	幹事				○		1	21

No.	回生	No.	氏名	幹事	平成29年 第25回	平成28年 第24回	平成27年 第23回	平成26年 第22回	平成25年 第21回	参加回数	延べ人数
33	8	1	吾妻 正一	物故			○		○	2	
34		2	柏原 正治			○	○			2	4
35	9	1	平子 恵俊	幹事			○			1	1
36	10	1	榎本 邦正				○			1	
37		2	大竹 正美				○	○		2	
38		3	大和田 武					○		1	
39		4	小野 真人	幹事		○		○	○	3	
40		5	鈴木 俊美		○	○	○	○		4	
41		6	佐久間一弥			○		○	○	3	
42		7	佐藤 政和		○					1	
43		8	佐藤 政春		○	○				2	
44		9	鈴木 秀明		○	○	○	○		4	
45		10	蘭部 好正		○					1	
46		11	千葉 良司	幹事	○	○	○	○	○	5	
47		12	村谷 徹		○			○	○	3	30
48	11	1	猪狩 孝			○	○			2	
49		2	大井川 久			○				1	
50		3	中田 明		○					1	
51		4	渡辺 久	幹事	○	○	○	○	○	5	9
52	12	1	安齋 健治	幹事		○	○	○		3	
53		2	石川 利幸		○				○	2	
54		4	佐藤 敏男	幹事	○	○	○	○	○	5	
55		5	正木一太郎						○	1	
56		6	峯村 康三	幹事		○				1	12
57	14	1	高原 典宏	幹事	○	○	○	○	○	5	5
58	15	1	荒川 利家				○		○	2	2
59	18	1	遠藤 誠	幹事	○	○	○	○		4	
60		2	鎌倉 謙二				○			1	
61		3	佐藤 博史		○	○	○	○	○	5	
62		4	鈴木 忍	幹事	○	○	○	○	○	5	
63		5	田中 英正		○	○				2	
64		6	緑川 章		○	○	○	○		4	
65		7	渡辺 善智			○	○	○	○	4	
66		8	渡辺 法広			○	○	○		3	28
67	21	1	四家 康正	幹事	○	○	○	○	○	5	5
68	24	1	金成 明美				○			1	
69		2	蛭田 征子					○		1	2
70	25	1	唐木 克己						○	1	
71		2	中山 雅勝						○	1	
72		3	橋本 浩喜	幹事	○	○	○	○	○	5	7
73	28	1	中野 修			○				1	1
74	31	1	佐藤 則之	幹事	○	○	○	○	○	5	
75		2	佐藤 寛之					○		1	6
76	40	1	小野 太一郎	幹事		○	○	○	○	4	
77		2	西潟 直幸				○	○		2	6
78	43	1	神田 千波也	幹事			○	○		2	
79		2	直井 智	幹事			○			1	3
80	44	1	大平 優介				○			1	1
81	48	1	緑川 嘉記			○		○		2	2
82	51	1	鎌田 耀		○		○	○		3	3
83	52	1	三部 海	幹事			○			1	1
84	53	1	上遠野 莉久			○				1	
85		2	菊池 李玖		○					1	2
			会員参加数		36	50	47	44	35	212	212
			合計（来賓含）		40	55	54	48	41	238	238
					1回参加	2回参加	3回参加	4回参加	5回参加	合計	
					34	15	10	12	14	85	